



仏法領 ぶつぽうりょう

第91号

発行：真宗大谷派

念信寺

〒824-0202

福岡県京都郡みやこ町

犀川上高屋761

☎ 0930-42-0329

Fax 0930-42-0502

ホームページ

nenshinji.org

メールアドレス

nenshin@pony.ocn.ne.jp

「人として生まれて」

今年三・四月は親鸞聖人の誕生八百五十年の慶讃法要が勤まる。

聖人には人として生まれたことについての深い注目がある。



「生まれて生きる」

生きていると

嬉しいこと

辛いこと

悔しいことが

たくさんある



それが生きているということなのか

辛くても生きる

寂しくても生きる

世に生まれてきたのだから

母も父もそう願ったに違いない

でも疲れたときは

さぼって生きていてもいいと思う

それが

生きているということかも

知れない

(写真・文 大迫光浩)

カエルの子はカエルだけど、人は生まれてから一人前になるのは大変だという。人間が生きていくためには本能だけでなく、社会性を身につけ様々なことを学び、自分で考え判断して行動しなければならない。

現代の生活では、水は「H₂O」という化学式で表わされ、コンビニで百円ちよつとで買える。科学と流通の発達のお陰だけど、一杯の水と私との関係は明らかにならない。拝んでいただくことを忘れてしまったのだ。

水がどこにでもある水だから、この私もどこにでもある私なのだ。満足を自分に感じることでできず、つい自分の感覚的な快楽を価値基準にしてしまう。しかし、かがえのないこの一杯の水を美味しく飲みほすということは、世界を自分にいただくことなのだ。

コロナ禍以降、葬儀も「家族葬」の傾向が強まり、人の死はひっそりと個人的なものになってしまい、共にお見送りをして生きることを学ぶかがえのない大切な場を失おうとしている。

死は別れであり辛いことなのだけど、本当は生きることと深く結びついていて、広い視野を開く扉になっている。見送ることを通して自分もやがてこの世と別れる準備をさせてもらう。より深く生を学ぶ場である。死は暗く怖いものではないのだろうか。自分を中心にしてちよつぽけな心を満たそうとは思っていない自我中心の自分への問いかけなのだ。自我の苦しみはそのように問いかけていて、もっと広大な世界のあることを教えている。

受けとめる大地のありて椿落つ

(住職)



ひと

今回は思い出に残る追悼句を前坊守村上悦美に紹介してもらいます。

母の追悼句



今年二月、実家の寺で兄の一周忌が勤まり、当方の住職がお参りしてくれました。その折り、遠縁の親戚より問い合わせの電話があり、実家の母・中山節枝の追悼句を知りたいとのことでした。

香雪の梅尽日の看取り唄

を伝えました。

母はひどいパーキンソン病で、十一年以上動き出来ないまゝ、九歳年上の父と二人で床を並べて休んでいました。家族皆の行き届いた看護のもと、永らく穏やかに送りさせてもらっていました。

平成九年（一九九七）二月、母との別れの折り、兄が葬御礼に一句を添えたいと言いだしましたので、咄嗟に前出の句を出したのです。

実は念信寺前々坊守・春枝、つまり姑が家で伏せておりました。当時住職は東本願寺参務で京都でしたので、お寺の諸々は今の住職が務めておりました。

お寺の用事は色々ありますので満九十歳で寝たきりの姑は私の手元に居てもらい、四年間を過ごしました。その頃に

香雪の秋尽日の看取り唄

が産まれました。看取りとて暮らしの中にいるもので、見守られる方も、見

護る方も、大きいお陰のなかでみんなそれぞれに日送りしていました。実母への追悼句はこの句をもとにしたものです。

それにしても若くて元気だったなあと感じ入りますし、今は本当にお世話様なのにみならず思っています。皆様も御法体、大切に御送目なさいますよう念じ申し上げます。

ながらえていのちの和音静やかに

水音の絶へぬ日没の庭

悦美

〔香雪〕は白い花を形容して言う

生きているとは？

よしだあきかず

吉田昭和（北九州市小倉北区）

私達夫婦は、私は父を、妻は母を二十代で亡くしている。亡き親は、子供の配偶者も孫達も見ること出来なかった。私達は亡き親より五十年近く長く生きている。私はこの五十年間、人生の相談相手である父親がいなかった事を何度と無く悔やんだ事がある。もう少し長生きをして欲しかった。



私は子供達が中堅に達する迄は生きると決めた。親が早く亡くなる事は已むを得ない事ではあるが、子供にとつては不幸と思う。

私も後期高齢者の仲間入りをし、子供達は社会の中堅の年齢に達し、一応目標は達成したと思っている。只、子

供達から見ても、私の存在が役に立つかは、私の評価ではないと思っている。長く連れ添って来ていた妻、子供達、その伴侶、孫達に囲まれて、今はとても幸せであると思う。

良くしたもので、後期高齢者になると、身体の不調、認識力の衰え等を顕著に感じるようになり、困惑している。

やはり、四十年の会社生活が無事終え、妻、子供達、孫達に囲まれた人生を送れている事は、永く生きる事が出来たればこそその幸せだと感じている。

もう少しの時間、生きる幸せを家族と共に感じていたものである。亡き父の分迄。



秋彼岸法要 法話

「正信偈」生きて死ぬとは？

日時 2022年10月4・5日

講師 瓜生崇師 滋賀県玄照寺住職

〔仏法領九〇号より引き続き〕

法蔵菩薩因位時 在世自在王仏所

「正信偈」の3行目と4行目です。あらゆる生きとし生けるものを救うことで私も救われたという存在を「菩薩」って言います。一人で救われていくつてのは虚しいんです。ほんとの救いじゃない。菩薩はあらゆる人々を救いたいと思つて願いをこす。その願いが成就したら仏になるんです。法蔵菩薩の願いが成就した姿が阿弥陀さん。

菩薩が因位の時つてのは、阿弥陀さんが法蔵という菩薩だった時にあらゆる人を救いた

いつて願いを起こしたんだってことなんです。お経では法蔵は菩薩として名乗る前は国王だったって書いてある。俺が一番幸せになりたい。私を満たしたいと思つて我々は生きてる。その姿が「国王」っていう言葉で象徴されています。

この「世自在王仏」って非常に変わった仏さんなんです。この世において自在なる王様の仏って書いてある。この世というのは

「世間」でこと、もともと仏教の言葉です。真実を知らないで迷つて世界のこと。生まれかわり死にかわりを繰り返して迷つていく世界から出て、本当のありのままの世界に目覚めていく。世間を出ることが仏教の目的なんです。皆さんお話し聞いている目的というのは、世を出ることなんです。この「世自在王仏」っていう仏さんは世間を離れて覚りの世界に入ったにも関わらず、また世間に帰ってきました。

「自在」っていうのは、あらゆるものを救つていくって意味です。生きとし生けるものの苦しみは私の苦しみである。僕らが地獄に落ちたならば、一緒に地獄に落ちる、一緒に苦しむって言うんです。こういう救い方を選んだ仏さんが世自在王仏だったんです。その国王は国王の位を捨てた。そして「法蔵」と名のつた。

この「法蔵」というのは、元のインドの言葉で「ダルマ・アーカラ」って言うんです。法の鉱脈とか源泉の意味。本当のことに目覚めたいとか、知りたい、聞きたい。なんか知らんけど、お寺に足を運んで、面白くない話を聞いている。心の底に私一人が満たされて、生きて死んで迷つていく。本当にそれでいいのかということが。だから虚しさとか寂しさっていう気持ちが出てきたりもする。これは法蔵なんです。



法蔵は世自在王仏に

言うんです。「私もあなたと同じようにあらゆる人々を救っていききたいんだ」と。そして世自在王仏に聞くんです。



「私の本当の願いは、なんですか」って。皆さん、どういう願いを持って生きておられますか。例えば病気になりたくないとか。健康で生きたいとか。小さい願いから大きな願いまで、我々の心の中は願いでいっぱいなんです。ところがその願いが私の人生を貫く本当の願いかって言われたらわからないんです。本当に願っていることは何か、法蔵はわからなかったんです。世自在王仏に聞いた。「私の本当の願い、教えてください」って。

そしたら世自在王仏は「それはお前の問題だから、お前が知ってるはずだ」って言うんです。これ非常に大事なことを言われている。仏教って答えを教える宗教じゃない。これ基本的なことで、仏さんの教えは最後は自分に尋ねる。お釈迦様は、「自らを依りどころにし、法を依りどころにしないさ」って言ったんです。法というのは真実。真実そのものを依りどころにしていきなさいと。

ところがそれを聞いた法蔵菩薩はこう言い返してる。「この私の願いっていうものは、あまりにも広く深く自分でもわからないんです」と。僕は自分のことだから、自分が知ってるやろと思う。ところが私の存在は自分が思ってるよりかはるかに深くて広いんだって法蔵は言ったんです。自分がわかっている自分の姿なんて本当に浅いもんだって言うんです。そして法蔵は言います。



「今までどんな仏様がどんな願いを立てて、どうやってみんなを救っていったのかとしたのか、それを私に教えてくれませんか。さっき一番大事なことは自分に聞かなきゃわからないって言いました。でも自分に聞くって言ったから、例えばトイレに閉じこもってというように思っちゃうけど、そんなことしたって何も出てこない。」



どうするかというと、法に触れるんです。つまり、今までどんな人たちがこの問題に向き合ってたかっていったのかを聞いていくんです。聞いて自分に尋ねる。これが自らを依りどころにし、法を依りどころにしろってことなんです。真実によって照らされた私の姿を見ていきなさいって。これは、今皆さんがやっていることです。こうやってお話しを聞くということなんです。聞いて自分が照らされるってことなんです。

親鸞聖人をはじめそれぞれの人たちがいろんな思いを抱えてこの問題に向き合ってた。それらの言葉や歴史を聞いていく。これがお聴聞ってことです。浄土真宗でお聴聞が大事って言われるのは、こういうことなんです。

世自在王仏は法蔵菩薩に二百一十億の仏様の世界を見せて、その願いを伝えたとて言われています。これがこの後に出てくる言葉なんです。

親見諸仏浄土因 国土人天之善惡

大宇宙のあらゆる仏様がどんな願いを立ててみんなを助けようとしていったのか、つぶさに見ていく。そしたら法蔵菩薩は気づいたんです。これは全部、善し悪しで人を救おうとする世界なんだと。僕ら物事に全部善し悪しをつけたがります。

ものすごく単純に言うとか、ちゃんと仏様を信じとつたら浄土に行きますよ。疑ってたら地獄に落ちますよ。僕らの仏教観ってそういうもんじゃないですか。救いに境界をつけてしまう。これは仏教に限らず、宗教ってどうしてもそういう性質がある。結局これってみんな善悪の世界のことです。

建立無上殊勝願 超発希有大弘誓

どういふことかと言うたら、法蔵菩薩は自分はこの善悪というものを超えた救いを願いたいって言ったんです。なんで法蔵がそんなこと願ったか。僕ら善人として生きようとして生きて生きたいことあります。悪人として生きたいと思っちゃって、悪いことしてしまふことあるでしょ。例えば今、ウクライナで戦争してます。妻がよく言います。あんたはウクライナに住んでたら、今頃鉄砲持って戦地に行かなきゃならないねって。

親鸞聖人の時代は平安時代の後期で、飢饉の時代です。人を殺してご飯を取ったりとか、死体がゴロゴロ転がって、いろんな人の生き様を見てたはずなんです。だから親鸞聖人は自分のことこう言ってます。「さるべき強縁のもよおさばいかなる振る舞いもすべし」。自分の生き様を自分で選べない。善人と言い切れるものが救われていくのならば、悪人は見捨てられることになります。でもお釈迦様はそういうこと決してしなかった人なんです。

阿闍世王は権力を握ってあれだけ人々を殺して、自分の父も殺して、少しも反省もしない。番救われないやつだ。それを一番最初に救わなければならぬ生きとし生けるものが救われる道は絶対に開けないって言うって、お釈迦様は阿闍世を一番



先に救おうとする。

法蔵は言うんです。善悪によって人を隔てない救いをしたいんだ。そういう願いを立てたいんだって。それを聞いた世自在王仏は、「そんなことをもしするんだったら、あなたは永遠に修行し続けて、仏になれなくなるよ」って言ったんです。ところが法蔵は自分の救いを放棄するんです。

「私は善悪を超えた救いを願いたいんです」って。



あらゆるものを超える願いつてことなんです。その願いは言葉になるという願いだったんです。人間は言葉で迷ってゆえに、言葉を拒絶することができないって気づいた。だから、法蔵は「言葉になつて、その言葉をもって宇宙を満たして、そして目覚められない人を永遠に私呼び続ける」って言った。その言葉とは何か。私は「南無阿彌陀仏」という言葉になる。気づくまで、目覚めるまで私は永遠に呼び続けるって、言葉になつて我々に接しようとした。



言葉だから、言葉が届くか届かないかです。人間は善し悪しに関係ない。長生きした人も早死にした人も、男も女も、貧しい人も富んだ人も、あらゆる人はみんな同じ言葉をもって接する。そういう願いを立てた。これが「南無阿彌陀仏」という言葉なんです。こういうことが「正信偈」に説かれています。ずっと読んでたら「本願名号正定業」が出て来るんです。名号ってのは名前や言葉のことです。私は名前、ナムアミダブツという言葉となつて人を目覚ますっていう、その願いを成就したんだって「正信偈」では書いてあります。というわけで、今日のお話はこれで終わります。

(2022年10月4日法話後半抄録)



春のお彼岸法要のご案内



まだまだ朝晩寒い日が続いております。皆さまいかがお過ごしですか？

さて、春のお彼岸法要を左記のように勤めます。今回も距離をとって座れるように、地区ごとに振り分けしておりますので、できれば表の左下の日にお参りくださるようお願い致します。当日のご都合が悪い場合はいずれの日でも構いません。

※マスクの着用をお願いします。

お茶は各自ご持参ください。

合掌

記

一、日時 三月二十五日(土) 二十六日(日)の二日間

一、講師 北嶋 文雄 先生

福岡県筑前町

浄土真宗本願寺派 光蓮寺



期日	法座 昼席	地区ごとのお参り予定をお願い
3月25日(土)	午後1時30分	伊良原・横瀬・上木井・下木井・大丸・内垣・下本庄・松坂・他地区※
26日(日)	午後1時30分	上本庄・鏡畑・上高屋・他地区※

※他地区とは、豊津・築上・行橋・苅田・田川・北九州等です。

コロナ対策として

- マスクの着用をお願いします。●お茶は各自ご持参ください。
- 法座は2日間午後のみです。
- 出来れば地区指定の日にお参りください。
- 本堂の椅子は余裕をもって配置し、換気に努めます。
- 体調の不安がある場合は、遠慮ください。

法座予定

二〇二三年

●皆作永代経法要

六月十七(土)・十八(日)
講師 舟川智也師
(行橋市 了徳寺住職)

●秋彼岸法要

九月三十(土)・十月一日(日)
講師 瓜生 崇 師
(滋賀・東近江市)

●ご正忌・報恩講

十一月二十一〜二十三日
講師 未定

昨年の御正忌・報恩講法要

日時 2022年11月21日〜23日

講師 藤谷知道先生(宇佐市勝福寺住職)

コロナウイルス予防の為、午後のみ、お斎なし、地区割で行いました。多くの方にお参り頂きました。



お寺の催し・活動



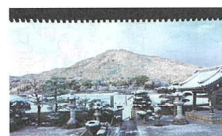
2022、12/8京都組執行部会



2022、12/9浄真寺掃除



2022、12/20四日市別院お荘厳は出来ましたが、報恩講中止。
コロナ感染のため



2022、12/19雪



2022除夜の鐘



1/20初組会

あとがき

今号のテーマは「生まれて、生きる」です。今年の3・4月は本山では親鸞聖人御誕生八五〇年、立教開宗八〇〇年の慶讃法要が厳修されます。

親鸞聖人には、「生まれた」ことは、「人として生まれた」であり、それは苦悩の世界を迷いつづけてきた生存を生きることなのであり、そこに救いはあるのかという明確な課題をもっていました。

そこで今回はこのテーマをそれぞれの思いから語ってもらおうと考えました。東日本大震災から今年12年目、13回忌に当たります。多くの人が喪失感を抱えながら、人として生まれたことの意味を問い続けてきた年月でなかったかと思えます。

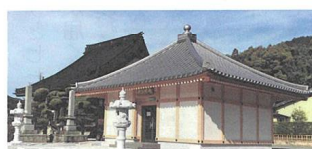
二〇二〇年初頭からのコロナ蔓延、昨年はロシアのウクライナ侵攻がありましたが、私はよそ事のようには生きていません。これって？です。すね。



2/17組教化研修会



2/12山口家上仏事



新納骨堂・次第に埋まりつつあります。



2/15四日市別院会議